

陰

謀

岡

本

俊

弥

∨∨冬

ぼくが「シルクール」のことを知ったのは偶然だった。

Made in Shirgool

寒い日で、部屋の隅に積み上げられている衣類の山から、ぼくは重ね着するシャツを漁っていた。その中の一枚、ふだん何気なしに使っていたTシャツの、よれよれになった原産国表示にそう書かれていたのだ。国名なのだろうが、聞いたことのない国だった。

シークール、シルクールかも。

いつ買ったシャツだろう。無地で、緑というかヨモギ色の地味なシャツだ。少なくとも新品ではない。何度も洗濯し、畳まれることはなく、部屋の隅に雑に積まれたものの一枚だった。オールシーズン使う衣類なので、いちいち憶えてはいない。

なじみのない国名だ。

ふだん無視してきた、細々とした衣類のラベルを改めて見たのだが、シルクール（と読むことにした）の表記は他にはなかった。

大半はベトナムやミャンマー製で、ぼくの常識と一致する。

まあ、そりゃそうだろう。

どこの国なのか。

だが、端末で検索しても、関係なさそうなノイズばかりだ。少なくとも同じ綴りの検索ワードはない。あいまい検索で出てくるのは、エロサイトやアニメの隠語めいたもので、どう考えても違う。それらしい情報は何も出てこなかった。

なんだこりゃ。

でも、図書館で調べるほどのものではない。行ったところで、見つけられる自信はまったくなかった。捜し物とか調べ物とか、とにかく情報検索は不得意なのだ。ふだんの好奇心が足りないのかもしれない。

ぼくは肩書きのない、一介の勤め人である。

一度結婚して離婚したあとは、長い独身生活が続いている。

最近、ちよつとした偶然から、元妻と再び話せるようになった。

円満に別れたわけではないし、住んでいる場所も勤めている会社も違う。二度と会うことはないと思いついでいた。

しかし、都心の書店で立ち読みしていると、隣に元妻がいることに気がついた。うるたえ気味にしゃべったのだが、昔感じた強いわだかまりは、きれいさっぱり消えていた。不思議な気分だった。

以来、月に一度会って、近況報告にもならない雑談（としか言い様がない）をする仲になった。

「何だったのかね、喧嘩ばかりだったのに」

「怒鳴り合いしてね」

「何もかも気に入らなかったよ、言ったことも聞いたことも」

「あのころは」

「あのころはね」

遅く帰ってきては口論になり、その繰り返しに耐えられなくなった。だが、喧嘩の内容は記憶にない。離婚したとたん忘れたようだった。つまりないことだったのだろう。

「まあ、いいじゃん。済んだことだし」

「ああ」

ぼくは苦笑する。語彙が貧弱なぼくに対して、元妻の罵倒は針に似て鋭かった。その痛みだけは憶えていた。それでも、言葉は口にするのと、瞬間に消えてしまう。不満が澱のように溜まって、最後に吹き出した昔と違って、いまは何も残さず流れてしま

う。

「まるで養護施設のお年寄りみたいだ」

「縁側に座って、猫をだいて雑談するの」

「同じことを何度も何度も繰り返して話したりね」

「でも、厭きない」

「どんどん忘れちゃうからね」

他人同士になると、無責任なぶん気が楽だ。残業時間に制限のあるヒラ社員には、それなりの時間がある。結論もない会話が、だからだら続けば暇つぶしにはなる。

二人とも、再婚しようとか過去を贖罪しようとか、そんな気はない。メールアドレスくらいは交換しても、お互い住所は知らないままだ。

話の途中で、ぼくはシルクルのことを思い出した。

相変わらず寒い日だった。珈琲店の中は乾いたエアコンの空気で暖かく、結露もしない窓の外は晴天だった。

「シルクルって知ってる？」

「いきなりなんのことよ」

ぼくは、ラベルの話をした。

「いくら捜しても出てこない」

「いまだきそんなことあるのかな、探し方が悪いんじゃない」

元妻は目の前で検索して、すぐに結果を見せてくれた。IT関係となると、昔から得意なのだ。

「ほら、ある」

国名が表示されている。

アフリカ東海岸にある国だとあり、十年ほど前にソマリアから独立したと、ほんの数行ほど記載されていた。

どんな国なのかイメージが湧かなかった。現代アフリカとなると、授業で習った憶えもないのだ。受験科目ではなかったから、習ったとしても記憶にないだろう。

ソマリア？ 東海岸？ ってどこだっけ。

「もっと情報はないのかな」

「何が知りたいの」

二番目の検索結果は、もう関係なさそうだった。

「日本に製品が輸入されてるんだから、もうちよつと情報があつても」

元妻はまったく反応せず、呆れたように言った。

「と言われてもね。悪い癖だね。具体的にまとまってもいないことを、漠然と口にする。聞いている方は困る。答えないと不機嫌になるしさ」

思いつきをすぐにしゃべってしまう。会社でも、若い頃はよく注意を受けた。ベテランになった今では何も言われないが、たぶん無視されているだけなのだ。

「いいよ、もう」

ここで議論をするつもりはないし、ぼくは諦めた。

一ヶ月ほどが経った。ぼくは百均の雑貨店でシルクルの表示を見つけた。

それは小さなLEDライトで、通常のペン型よりずっと細い。デザインは格好いいが、何だか持ちにくそうだった。どこから電池を入れるのだろうか。いや、充電不要と書いてある。

どういう意味だ、電池が要らないのか使い捨てなのか。輸入元は雑貨のチェーン店で日本語のパッケージ、原産国がシルクルだった。



「なんで買わなかったの」

「だって、使わないし」

「話のネタになるでしょうが、百均なのに」

「ああ、まあね」

「気が利かないなあ」

ぼくは元妻に怒られた。

正直に言おうと、ぼくはシルクルのことを忘れかけていた。しょせん衣類や雑貨を作っている国なのだ。しかし、元妻は一転興味を抱いたようだった。離婚前は、そういう気分の変化が分からなかった。言った言わないで揉めたあげく、後戻りのできない罵り合いへとエスカレートするのだ。

数日後、ネットに小さな記事が載った。

シルクルの首長が訪日し、首相と会談したという内容だった。相手が大国でもない限り、途上国との会見は大きなニュースにならない。写真すらないベタ記事だ。

しかし、首長の発言に「これから日本に大規模に投資する」と書かれている。

ちよつと意外だった。

アフリカの小国が日本に詣でてくるのは、援助を期待してのことだ。日本は無償援助をしないケチな国だが、土産に少額の有償援助、ODA（要返済）くらいは約束する。反対に、向こうから投資をするなんて聞いたことがない。もしかすると金持ちの産油国だったのか。

ぼくはニュースを元妻に送った。

「なんか変な感じだね」

短い感想が返ってきた。

▽▽春

桜も散り、木々の新緑が濃さを増してくる頃、検索のトップにウィキのデータがでるようになった。

新しくできたものと思うのだが、その割に内容が詳しい。もしかしたら、アフリカ

の（ぼくには読めない）言葉で書かれたバージョンから、単純に引き写しただけなのかもしれない。

地図があった。

「ここにスエズ運河がある。その下の細い海が紅海、角を突き出してるのがソマリア」  
元妻が解説してくれる。地理音痴にもよく分かるようにだ。

内陸にはエチオピアがあり、その下にケニアがある。

「ケニアは知ってるよね。サバンナにゾウとかキリン、ライオンが群れる、ありがちなアフリカの国」

シルクルは、ケニアとソマリアに挟まれた細長い国だった。

概要にはこうある。

国土の南端はインド洋に接し、ジュバ川に面した主要都市キスマーヨに貿易港がある。首都は内陸部のヨーントイにある。国土の大半は半砂漠だが、南の沿岸沿いには森林地帯がある。

シルクルの歴史は短い。

二十世紀末から二十一世紀初頭にかけて、ソマリアは内戦で大きく乱れていた。国内は国際機関も手を焼く混乱の極み、無政府状態だったのが、最終的に三つの国に分裂してなんとか安定化する。北部のソマリランド、東部のソマリア連邦共和国、南部のシルクール・イスラム共和国である。シルクールはもともと原理主義者の支配地域だった。しかし、新たな穏健派イスラム政権は政経分離政策をとり、経済はシンガポールや香港並みに自由化されている。

シルクールの面積は、隣国ソマリア連邦の五分の一ほどしかない。

「それにしても、人口が多すぎない」

人口は二千万で、ケニアの半分近くもある。他のソマリア全土よりも多くなっている。

「台湾とか、オーストラリアくらいあるね」

「それって多いの。日本の六分の一だけ」

「できたばかりでしょ。それなのに分離元の国より多いって、何で」  
首都の写真がある。

ビジネスセンターである中心部には高層ビルが見えるが、周辺はさながら工場団地のようだ。砂漠だった土地の大半が整備され、低層で床面積の広い無数の工場群で埋まっている。対照的に、林で囲まれた集合住宅も目立つ。アフリカ全土から集まる出稼ぎ労働者を収容する巨大な住居施設だという。

市場の写真がある。

あらゆる品物を扱うマーケットは、さながらアフリカのもつほで、南アフリカからエジプト、モロッコまで、さまざまな人種を見ることができるといえる。

鉄道網の模式図がある。

隣国のソマリア、ケニア、エチオピアと、ディーゼル特急を使った高速鉄道で結ばれ、そこから先は過去に中国が整備した、大陸横断の基幹鉄道網につながる。

工場の写真がある。

豊富な鉱物資源など原材料が、鉄道を使って運ばれてくる。材料は海外に直送されず、シルクルールで加工され、高付加価値商品となって輸出される。鉄鉱石やボーキサイトから、薄板やアルミを生産する重工業、部品を生産する電気電子工業までである。

世界のバイヤーが溢れる、貿易センタービルのロビーが写っている。

商品の上流から下流まで、労働と加工貿易、生産のための一大拠点がある。つまり、シルクルはアフリカ全土の窓口なのだ。

「GDPは南アフリカを抜き、アフリカトップだって」

ぼくは意外に思った。

十年でこんな大発展ができるのか。国ですらない砂漠の片隅の、内戦で荒れ果てた土地だったらしいのに。

まあ、確かにビルや工場が建つのに十年はかからない。鉄道だって敷けるだろう。

「でも、電気を作ろうとしたら発電所が要るし、上下水道が完備しなけりゃ、工場も人もやっていけないよ。土木工事はとても時間がかかる。ビル一つ一つは良くても、道路からインフラ整備までとなると、すごく長い」

「市場だっけいきなりできたりしないでしょ。消費を賄う人がいなければ」

「それぞれ。さつきも言ってたけど、十年でゼロから二千万人なんて、どうやって」

「ゼロってことはないけど、面積比でせいぜい二百万人、出稼ぎを含めてとか」

「在留外国人なら人口に入るかも知れないけど」

二千万引く二百万、だったら人口の大半が外国人か。

確かに、国籍を持たない在留者もGDPには貢献するのだが、在留者の方が多い国なんてあるだろうか。アラブの国はどうなのだろう。

季候が良くなった。

新緑が広がり、街路樹の木陰を濃く染める。晴れの日が増えた。乾いた空気と夏と変わらない日差しが、なんとなく気分を浮わつかせる。

ぼくは注意して原産国表示を見るようになった。雑貨だけではなく、電化製品とかもだ。

ほとんどがシルクル製だった。

大型家電の裏側に付いたラベルを見るのは大変で、店員に不審がられたが、分かった範囲ではすべてがシルクルだった。近場の中国と違って、輸送費のかさむアプリカとなると、よほどのメリットがなければこんなことにはならない。

念のため、原産国表示の明示してあるネット商品も見た。

同じ傾向だった。

「ぼくの知る限り、生産は一日ではできない。何年も前から工場建設とか、サプライチェーンの構築とかやってたんじゃないかな」

「会社変わってないよね。メーカーだよ」

「え、ぼくの会社のこと」

「きみのところはどこの。海外工場もあるでしょ」

「そうだけど……」

中国とかメキシコにはあったかも。でも、正確にどこなんて知らない。生産部門でもない縁遠いのだ。事業所とか工場の所在地情報は、ふつう社外向けのホームページに置かれている。社員はわざわざ見ないだろう。

「あいかわらずね。周りに関心がないんだから」

そう言っただけのため息をつく。

ああそうだ、ため息の意味が分からなかった。

疲れて帰ってきて、何か話した後のため息。無性に腹が立ったが、今なら分かる。



相手の言うことを聞かないぼくに、愛想が尽きていたに違いない。

あの頃は、人に配慮する余裕などなかった。会社でのいろんなトラブルで、ぼくは追い詰められていた。愚痴を垂れ流すだけで、妻にもあったはずの不満を聞く気持ちなどなかった。

元妻はさつさと検索をする。

「あるね」

端末には、ぼくの会社のシルクル工場が写っていた。竣工してから日が浅いようで、国内工場をはるかに真新しい。

「あるのか」

ぼくは気が抜けた声で言った。もしそうなら、会社でも大きな事業変革があったはずなのだ。何も気付いていなかった。

∨∨夏

月の後半に雨の季節がやってきた。ぼくの住む地域では、どしゃぶりでこそないものの、例年より雨量は多く、日を空けることなく降り続いた。

（アフリカと日本との貿易不均衡について）という記事がある。

国際面のニュースをよく見たせいだろう。ニュースサイトの上位に、アフリカ関係の記事が並ぶようになったのだ。MLBやNBAより国際面が上だなんて、ぼく的には信じられない。

近年の貿易収支を見ると、日本の赤字幅が深まっている。その一つの原因にアフリカとの不均衡がある。アフリカからの輸入が急増する中で、輸出がほとんどないのが問題だ、という論旨だった。

国別の表ではシルクールが筆頭に上がる。日本の輸入の二〇パーセントを占め、年々拡大している。貿易は相手国によって、バランスが悪いことがある。オーストラリアのように原材料供給国なら輸入が大きくなるし、アメリカのような消費国なら輸出が大きくなる。輸出がほぼゼロは奇妙だが、シルクールが日本に頼らず自前で材料を確保し、一方的に輸出するからなのだ。

「これって変なんだよね。日本の工場があるのなら、そこに材料を供給する必要がある。だったら、日本からシルクルに輸出がある。自国内で調達と言うことは、材料メーカーまで自国内にあることになる」

「サプライチェーンのことだよ。作るのにどれぐらい、かかるもんなの」  
元妻が質問してくる。

「どれぐらいって」

「部品メーカーが現地生産するまで」

「同時に移転してればすぐかもしれない。例えば車メーカーが海外生産するときは、配下の部品メーカーも同時に現地工場を作る。でも、部品メーカーが使う、もう一段下の材料は、いきなり現地で手に入るわけじゃない。ネジとか、そんな基本的なものでも最初はないんだ。だから日本から輸出して組み立てだけする。次に現地メーカーを育てるわけだが、それにはインフラが……」

「って、この前の話だよ」

「でも、記事はインフラの難しさなんて指摘してない。なんだか最初からあって当た

り前、そうなつてて当然みたいな書き方だよ」

「記事を書いている人が、製造のことを分かってないのかな」

「かもしれない。でも」

ぼくは雨のかかる窓を見る。雨粒が次から次へと流れ落ち、外は何も見えない。

「この表つて一〇年前からのデータがあつて、その最初から建国したばかりのシルクルが入つてゐる。輸入しなくても生産できる、小さいにせよインフラや、ネジとかの裾野産業ができていたことになる。分かつてないのは、ぼくらだけなのかも」

シルクルは、完成した姿で、忽然と現われている。

ぼくらは黙り込む。答えがないと知っているのに、考え込むふりをする。

いつもと違つて少し緊張する。こんな小難しいことを話し合つたことはない、というか、冷静に議論をした記憶がないのだ。

結婚していたころは、何を話題に会話したのだろうか。

梅雨が明けると、蒸し暑さと真夏の日照りが同時にやってきた。ちよつと前まで快適だった歩道の散策が、もう耐えがたい。休日は冷房代が惜しいので、ぼくは珈琲店

に入り浸るようになった。

とりたてて用事はない。端末の記事をひたすら流し読みする。

シルクールが目につく。いや、国について言及しているものは少ない。製品の説明とか使い心地とかを書く、内容の薄いステマ記事の合間に、シルクール製であると書かれているのだ。ステマなので、もちろん悪い評価はない。中には公平な評価もある。

有名サイトの製品レビューでは、長所や欠点などが比較的正直に書かれている。

ただ、どの記事もシルクールであることの謎には言及していない。

「分かって書いていないね」

「製品レビューの目的から外れるからな」

「あれから図書館に行って調べてみた」

元妻は真面目な顔で説明する。

図書館なんて、ぼくらとはまったく縁のないところだった。

「シルクールが載ってる本はなかった。高野秀行の本とか、アデン湾に海賊が出た時代以前はある。日本も、あの辺に派兵してたから。なのに、最近一〇年間がない。ま

あ、観光スポットもないし、人気がある地域とは言えないけどさ」

「ウィキ程度の内容もないのか」

「関連書籍がないか、問い合わせはしておいたけどね」

ネットも併せて調べてはいる。国名を入れると、商品に関するありふれた情報ばかりが検索に引っかかるようになった。

そもそも、自分たちは何を知りたかったのだろう。どんどんあやふやになってきた。手がかりがあるようでない。(そんな体験はないけど)霧の中で道を見失った気分だ。目的を持って調べていないからだろう。

▽▽秋

雨が降らない日が続いた。気温が下がりが爽やかな日のあと、急に台風が上陸するようになった。それも週を置かず次々と風を吹かせ、樹木や家屋をなぎ倒した。

ぼくは月一の会合を休もうかと思ったが、元妻から参加の確認が入ると気が変わった

た。幸い電車が止まることはなかった。

「ほら、こんな記事がある」

元妻が見せてくれた。

センセーショナルな煽りのあとに、国内の中小企業や、付随する知財権を外国企業が買いあさっている、と書かれている。

〈日本が買収される？ 知らないうちにあなたの会社も！〉

ターゲットは従業員三百人以下のメーカーが中心だ。こういった企業の多くは作っている商品が陳腐化している。納入先からコストを叩かれ、すでに赤字になっているところもある。財務体質が悪いと、新規開発しようにも、資金を一般の金融機関から調達するめどが立たない。たいていの地方銀行や信用金庫は、低金利で疲弊している。自分が危ないのだから、ちよつとのリスクも取れない。悪循環だ。

そこに海外の企業が入り、予想外の高値で買収する。買収されると、まず業務の棚卸しが始まる。メーカーの場合は工程や、使用材料、加工方法などすべてを記録される。

人が作業するのではない。日本代理店と称する業者が持ち込んだロボットアイが、さまざまな場所に設置され、ロボットが記録するのだ。外国人は一切姿を見せない。

そこから先の企業の運命は明確ではない。業務刷新が行われ、まったく新しい会社に生まれ変わった例はあるらしい。しかし、そのまま会社解散に追い込まれるケースが多い。どう転んでも大幅なリストラがあり、従業員の雇用が維持されることはない。

「これってほんとなの」

「まあ、そんなもんだろ」

ぼくは適当に相づちを打つ。

「ほんとに？ でも会社を潰すなら買収の意味がないじゃん。どういう意味かな」  
「金があるんだから、数を打って当たりを引くのを待っている、とか。当たりかどうかはロボットが決める」

「ほんとに？」

「いやまあ、一般論として」



「いい加減すぎるね、もっとまじめに考えてよ」

外国企業による買収には、安全保障がらみで厳しい規制があった。しかし投資元を絞ると、企業は金欠で潰れてしまう。国営にでもしないかぎり守れない。金銭の保証をしない安全保障なんて意味がないのだ。なし崩しに制限は緩み、大半の業種で再び外資が容認されるようになってきた。ただし、うまくいかない例が多い。

国別の表では、投資額の筆頭に、例によってシルクルがある。この記事の執筆者はアフリカの小国がなぜこれだけの資産を持てるのか理解していなかった。

風に冷たさを感じるようになった。

遅くまで台風が襲来し、そのたびに気温が上がったせいで、外出時に何を着るか迷う日が多かった。ぼくの場合は、ほとんどクリーニングに出さなのまま、ハンガーラックに掛けたままだ。いきなり冬になっても、衣替えに手間はかからない。シルクル製だった。

「まだその服着てるの、いいかげんに捨てたら」

元妻はあけすけに言う。

「シルクールだよ」

「え、でも結婚してた時からあったよね」

元妻は意外そうな顔をする。

そうだったろうか。買ったのは何年前だろう、思い出せない。

さらに過激な記事が出た。大手の配信サイトなので、まとまった読者がいるところだ。ここに出るからには一般読者の興味が、多少なりとも増したということではないか。

〈アフリカ、知られざる侵略者〉

いまアフリカから集中豪雨的な輸出が続いている。

アフリカ製は安価ながら一定の品質がある。競合する日本製品は駆逐されつつあるのだ。多少品質に差があっても、致命的でない限り安いものが売れるのは、過去の消費者動向を見ても明らかだ。

それにより、細々と残っていた国内メーカーが破綻に追い込まれている。調べていく

と、その破綻の多くは意図的なもので、外国企業に買収された後、破綻処理に追い込まれる例が多数を占める。統制のない資本主義社会では、こういったことはしばしば起こる。

自動車が一般化する前、アメリカでは鉄道が公共交通の要だった。自動車普及の邪魔になると考えた自動車メーカは、次々と鉄道会社を買収し、そのあと事業を畳んで使えなくした。

では、日本では次に何が起こるのか。すでに始まっている輸出攻勢を見れば、その答えは明らかだろう。日本人の雇用は失われている。いまこそマーケットに対する侵略に目を向け、輸入量の規制に踏み込むべきである。

「アフリカって大ぐくりだね」

「シルクルって書いても、知名度がないことを知ってるからだろう」

「結論はよくあるパターン。輸入を止めたって本質は変わらない。小手先でなんとかしようって、なるわけないでしょ」

「まあ、答えが分かれば苦労はないけどね」

もう一つの記事はルポ風だった。

〈秘密国家シルクル潜入記〉

アフリカトップのGDPを誇る国をご存じだろうか。今や南アフリカではない、シルクルである。ケニアに隣接するこの小さな大国を訪れるのは、しかし容易ではなかった。

まずこの国では、一般旅行者が使える観光ビザが下りない。国内に観光に値する施設がないという理由が付けられる。可能なのはビジネスビザで、それも滞在可能な期間は、わずか十日間ほどだ。これでは駐在などはできない。商談をするだけで終わってしまう。シルクルと我が国には国交はある。しかし、膨大な貿易量にも関わらず、人的な交流は極めて限られる。コンテナ船が常に行き来し、国際空港を持つ国なのに、鎖国下にあったブータン並みに国を閉じているのは不可解である。大使館を訪れても、取材目的の渡航は許可されなかった。

そこで、隣国からの入国を試みた。日本からケニアには比較的容易にいける。そこ

から鉄道を経由すれば入国可能だ。実際、近隣国の国民であれば、労働ビザが下りやすいと聞いた。しかし、それはあくまでも労働者のためのもので、記者の訪問を認めるものではない。労働者を装うとしても、東洋人である記者では目立ちすぎる。以下は、現地で実際にシルクルで働いた労働者を捜し、インタビューすることで分かったことである。

最初にインタビューした相手は技術者だった。その技術者によれば、シルクルで働ける労働者はかなり限定されているらしい。まずビザが下りると、専用の国際列車に乗って首都圏の駅まで運ばれる。そこでバスに乗せられ、居住施設に送られる。写真でよく目にする高層アパート群だ。大きめのワンルームが一人に割り当てられるのだが、奇妙なのはそこに作業用の端末が置かれ、職住一体となっていることだ。仕事内容は端末を通して送られてくる。機材や回線を指定するのは、イントラネットのようにシステムが閉じているからだ。食事や買い物などは、地域内にあるモールを利用する。仕事はもちろん、行動できる範囲も限定されている。

もう一人は工場労働者だった。工場はアパートから離れており、毎日バスで通勤す

る。ただ、工場の中で働いている人間は少ない。生産は自動機械が一貫して行う。労働者は、メンテナンスのための監視作業をするだけだ。

二人の話には共通点がある。きわめて労働人口が少ない国という事実だ。多数の在留外国人がいるとの情報もあるが、伝え聞く人口があるとは思えない。広大な工場に数人しか人がおらず、在宅勤務が基本、しかもアパートは外観から判断できるよりも、はるかに収容人数が少ないと思われる。この国には何が隠されているのだろうか。

「なんだ、結局入れてないじゃん。伝聞だけか」

「日本人がアフリカに潜入取材なんて無理だろ」

「それにしてもほんとかな、工場に人がいないのは」

「自動化されてるのならありえる、というか世界の自動化工場はそうなってる」

「でも、自動化するためには元がいるでしょ」

「……あれじゃない。ロボットアイを使うやつ」

「買収した先で作業をコピーしたやつか」

「何社分も学習するのだから、単なるコピーじゃ済まないだろうけど」

「人口のこともある。もっと少ない、二千万もいないとか」

「ほんとうにすべての工場が自動で、交通機関も自動で、経済はすべて輸出で回すとすると、人口なんて必要ないかもしれない」

「国に、はたして人間が必要か、だね。怪しまれないように人口を詐称したのか」

〈短信・人工国家シルクルの秘密〉

国家は人口によって国力が決まるのだが、シルクルでは事情が異なるようだ。

人口は内需のために必要である。外需だけで国が成り立つのなら、多くはいらないのかもしれない。しかし、常識でいえば、外需には生産が必要で、生産には人が必要だ。シルクルの場合、そもそも国民のベースが存在しない。既得権者がおらず、過激派が駆逐された結果、古い権力者もいない。最初から自動工場を建て、すべてを輸出するという人工国家のモデルが作りやすかった。この国は、アフリカ諸国から集めたファンドをベースにしていると考えられる。それらを集中的に投資することで、十

年前に国家の基礎が短期間で立ち上がり、あとは自走する中で資本を高めていった。小さな国であるが故に、警戒もされずに重要なノウハウを収集できた。他の国ではジャンク扱いだったノウハウも、一つに集めればまったく新しい価値を生み出す。世界に類を見ない知財王国となったのも頷ける。最近では日本のメーカーも生産委託を増やしている。現地指導は不要、工場の使用権を買うだけで生産ができてしまうのだから、一般的なOEMやODMよりもお手軽だ。

「へえ、なんかすごそうじゃん」

「この通りなら、シルクルは国というより大きなブラックボックスだな。何でも出てくるけど、外からは中身が分からない」

「ほんとうにこうなのかな」

謎は解けたのか。

元妻は納得していない様子だ。だが、ぼくの場合は、人の説明でなんとなく分かってしまう騙されやすい性格だった。反論できるほどの持論もない。



それにしても、一年足らずの間にシルクールの情報は大きく変化した。矛盾する部分もある。変わりすぎで、この先どうなるのか予測は困難だろう。

いや、大それた予想なんてしないが。

紅葉が始まり、落ち葉が舞い散る。秋の終わりになった。

クリスマスシーズンの直前、アメリカで新しい法律が大統領令で布告される。

人工知能によるノウハウ取得は、契約の有無を問わず窃盗に当たるというものだ。

アメリカのノウハウを使った生産物は、どのような手段かにかかわらず、すべてアメリカ政府の許諾が必要という勝手な法案だった。台頭するシルクールを名指した法案だとニュースは報じた。何がアメリカのノウハウかは曖昧だ。深層学習内容に含まれないという証明ができないからだ。

報道の前後から、日本でのシルクール情報は徐々に減少していった。

善し悪しと関係なく、一度アメリカが決めたことは日本では既定事実になる。強制でなくとも、政府の意向に反するものは排除される。シルクール製品は輸入禁止となり、生産品はめっきり見かけなくなった。急遽生産地が変更されるらしいが、製品の

質は下がり、ものによってはスペックすら下がるといふ。

不可思議なことに、たくさんあったはずの在庫品も消滅する。わずか一ヶ月ですべてが捌けるなど、ありえないはずだった。

「こんなのがあったよ」

その年最後の例会で、元妻はうれしそうな顔で、小さなラベルを見せてくれた。

「なんて読むんだろうね」

Made in njama